

要 旨

作品 «of» について

——道徳的正義の視点から——

米田 江利

本論では、道徳的な感情から発せられる正義心の危うさを考察することを目的とする。加えて、同様のテーマによる作品制作を行い、検証を行う。

正義とは、アリストテレスが「完全な徳としての正義」と述べているように、絶対的な善や正しさという意味を有している。例えば、社会生活における規則やルール、または法律は正しさであり、これを遵守することは正義に適っている。しかし、正義の過信、すなわち「正義の行き過ぎ」は時に悪を創出し、強い暴力性をもって他者を攻撃する危険性がある。それは個人の言い争いのような小事から、戦争、革命などの大事に至るまで幅広く及ぶ。

本論では正義を三つのパターンに分けて、正義の持つ危うさについて考察を行う。まず、前述した社会の公正のための正義を「社会的正義」とする。次に、人間の道徳心に基づいて発揮されるより直感的な正義を「道徳的正義」とする。また、この道徳的正義は、一般的な正義の概念（社会的正義）の基盤になっていると考えられる。最後に、正義には独善性が秘められており、特に道徳的正義を過信することによって生まれる偏狭な正義を「独善的正義」と位置付ける。つまり、基本的な正義（社会的正義）の概念は道徳的正義を土台として成立しているが、その道徳的な善の絶対性を追求することでそこに正義の独善性が発生し、より偏った正義心（独善的正義）が芽生える。すなわち、道徳的正義が行き過ぎた場合、無自覚に独善的正義へと変化することがある。

特に、ひとつの強い目的や意思を持った群衆は、道徳的正義を行使しているつもり、独善的正義を発揮していることに無自覚である。例えば、ナチ党によるドイツの掌握にはドイツ国民の「群衆化」の影響が大きいと考えられる。もちろん独裁者ヒト

ラーは歴史的にみて脅威の人物であったが、彼を独裁者へと上り詰めさせたのは、彼の熱狂的支持者（独善的正義を有する群衆）であったドイツ国民に他ならない。道徳的正義は人々を盲目的にさせ、ウィルスのように拡大されるにつれて独善的正義へと変化し、結果的に暴力的な要素をはらむようになる。

加えて、同様のテーマで作品《of》を制作した。本作品では個人が群衆化していくプロセスや、群衆の一員となって犠牲を生んでいく様子を抽象化し、映像で表現した。